

福島の痛みを忘れないために

先の衆議院選挙で自民党が圧勝して以来、政府の原発政策は大きく変化した。民主党政権が曲がりなりにも打ち出していた脱原発は、今、故意に忘れ去られ、再び原発推進のための原子力村が息を吹き返しつつある。しかし福島第一原発の現状は全く展望が見えないままである。歴史的には過去の技術となりつつある原子力に固執することは未来に逆行することではない。今ほど国民の意識と政治が遊離している時代はない。フクシマを忘れず、福島の痛みを共有して、新たな時代の扉を開くために闘おう。

福島原発の今と原発のこれから

4号機の燃料プールの燃料が引上げられ始めたとはいえ、これは通常の定期点検で行われていた作業であり、大きな一歩ではない。メルトダウンやメルトスルーした1号～3号の状態は全く不明のまま、今も毎時20トンもの冷却水を注入し続けなければならない理由も明らかでない。まして汚染水処理も進まず、被曝労働だけが過酷になっている。労働者不足は東電自身が認めており、今後ますます過酷な被曝にさらされる労働が待っている状況で果して廃炉に向けた作業は進むのだろうか。膨大な量に及ぶと予想される放射性廃棄物の処理に至っては、全く目途が立たない。政治家の保身のための先送りだけが幅を利かせている。全ては未来世代のつけに廻される。廃棄物処分場がないので廃炉に着手出来ない東海原発とは、一体何なのだ。これでは浜岡原発はじめ全ての原発も廃炉不可能になる。これまで原発を推進してきた自治体や政治家、電力会社、原子力産業界、専門家集団は今こそ責任をとらなければならない。極論すれば、彼らに燃料棒を引きとってもらうべきではないのか。現状のままでは、停止したままの原発を永遠に保存するしかなくなる。それでも金が動きさえすれば良い、というのが彼らの本音かもしれない。「もんじゅ」が良い例である。全く動く見通しもないままに、一日5900万円の維持費を浪費している。いつの日か核兵器を持つのを夢見て、技術だけは維持したい狙いもある、と聞く。佐藤栄作政権時代に密かにその構想が練られたようだ。当然、秘密保護法の対象になろう。原発は初めから不条理に満ちた技術であった。国民は騙されてきたのだ。

それでも諦めない

現在、全国のすべての原発が停止状態で、1970年に商業用原子炉の運転開始以来初めての事態である。これは福島原発事故による大きな犠牲の結果であり、その苦しみを今も受け続けている福島の人々を忘れてはならない。同時に、再び事故を起こさないために原発の再稼働を止め、新たなエネルギーの時代を切り開かなければならない。今、私たちは大きな転換点に立っている。矢継ぎ早に打ち出される際どい政策の争点化に国民は振り回され、大きな問題もすぐに過去のテーマになってしまう。それが自民党政治の意図的なやり方である。いつの日か、あの時こうしておけば良かった、と後悔する日が来ることが無いように、今一歩を踏み出そう。原発は過去の技術であることを確信し、未来を構想しよう。短期的には敗北することも多々ある。しかし、人間は信じるに足る存在であることを歴史は示している。いつの日か地球上から核が消える日を夢見て明日を迎えよう。

チェルノブイリと福島から未来を

人類は災難や失敗から多くを学び、未来に生かし、歴史を作ってきた。過去に、一部の政治家や支配者が自らの利益のために戦争を起こし、社会に破滅をもたらしたとしても、人々はそこから新たな社会制度や技術を編み出し、社会に生きる希望を作ってきた。「衆愚は天に通ず」、これは足尾銅山の公害反対に生涯をかけた田中正造の言葉である。彼は人々を信じ、敗北もまた未来への一里塚だと考えていた。普遍的な価値の追求こそが未来を作ると信じてまた明日を生きよう。

(河田)